

映画

震災の悲しみ 普遍的に

「春をかさねて」(佐藤そのみ)

東日本大震災の津波で石巻市大川小6年だった妹を「くした遺族の手に」交する劇映画だ。被災した子と母との心の傷と友情を描いた。監督の佐藤そのみ(24)は東京都が、自らの体験を基にした虚構の物語を通じて、震災の悲しみをより普遍的に表現した。英語で言う「マート」とは本来、人間が生きるための全ての「術」を指す。つらい記憶に向き合い、これからの人生を生きる手だてとして制作された本作は、哀のマー

トと題される。妹を「くした」14歳の少女祐未は「妹のため経費を貸えなければ」と義務感に駆られ、訪れる記者たちの取材に応じる。同じく妹を失った同級生れいは、ボランティアの学生時代に恋心を抱く。そんなれいに祐未は思わず嫌みを言うが、れいも震災の記憶を共有する人々と、胸の奥にしまっている吐き出せない人。祐未とれい、2人の登場人物が遺族の心情の両極を表す。両者の絆は、「二つの心情の間」に横たわる溝に架けられた橋のようにも読み取れる。佐藤には本作ととも、「ドキュメンタリー」があなたの瞳に映ったら」がある。震災のような重いテーマを映画が扱う場合、説得力を得やすいのは、フィクションよりもドキュメンタリーの方だろう。

一方、フィクションの制作は対象をより客観視する作業が求められる。佐藤は当事者ながら震災をやり引いた位置から眺め、冷静な視点を得ようとした。二つの異なる表現スタイルが互いを補い合った

「あなたの瞳」にも登場するが、大川小の校庭には、言葉監督「銀河鉄道」の夜」をイメージして見られた。だが描いた場面がある。賢治の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人的幸福はあり得ない」という言葉が刻まれている。

銀河鉄道に乗り込むのは、生者のジョバンニと死に向かうカムパネルラだ。「自分はなぜ生き残ったのか」「自分は生きていてよいのか」。震災で命をうないた子と母たちは、賢治の言葉を映すような問いにさらされ、深く言語化してきただけだ。

佐藤が取材に対し、「ずつと取材され抽かれてきたが、抽かれるのではなく、抽きたかった」と述べたことにも深い感慨を覚えた。遠坂自身が言葉を紡ぎ、制作物に仕上げた歩みは、震災10年が生み出した一つの果実だろう。

映画は、悲しみを抱える人々が犠牲者と対峙する「銀河鉄道」になり得る。賢治が愛した「マーハト」の海岸から北上川を下れば大川地区に行き着く。銀河に映ったヨシ原が美しい。本作は、地域の人々を癒やす大河の一端になる。

(敬称略)

(生活文化部・会田正實)

11月21日、石巻市・日観

丸商店



「春をかさねて」の一場面(佐藤監督提供)